

## 第5章 総括

焼畑(2)遺跡は大間町の南部を西流する奥戸川の左岸、標高33m前後の海成段丘上に立地している。調査区範囲は段丘の東部にあたり、段丘平場に接する東端と北端には沢地形や奥戸川へと続く比高差25m程の急崖が形成されている。

今回の調査の結果、縄文時代の焼土遺構1基が検出された以外に遺構は認められず、遺物も縄文時代後期前葉の土器や石器類が主体で、焼土遺構周辺のグリッド及び調査区中央部分で集中して見つかった以外は散漫に出土するにとどまった。石鏃は2点出土しているが、狩猟に直接関連する落とし穴等の遺構は検出されていないことから、狩猟域とは判定しがたい。先に示した重量分布図からは遺物の出土範囲が土器・石器類とも西側に広がる傾向を示しており、遺跡としての主体は今回の調査区の西側に存在していたものと思われる。

出土した無文土器の外面に付着する炭化物試料を用いた放射性炭素年代測定の結果からは、縄文時代後期前葉か若干古い年代が示され推定年代とほぼ一致する(第4章第1節)。北海道との関連を示す縄文時代後期前葉の遺物も含め、その他の有文土器も十腰内I式の遺物がほとんどで、今回の調査区を含む本遺跡周辺は道南部の影響を受けながら、比較的限定的な時期に人々が行動し使われていた可能性が高い。また、同一の炭化物試料を用いて行った炭素・窒素安定同位体分析の結果からは、C<sub>3</sub>植物の堅果類等が含まれる可能性が高いことが示されており(第4章第1節)、本遺跡が営まれていた時期や範囲は、半径1km以内に複数の河川や津軽海峡に面した海岸線が存在する中でも植物由来の食物への依存度が高かったことが推察される。

今回の調査区では数基の倒木痕から10世紀前半に降下したと考えられる火山灰を検出したが、当該期の遺構や遺物は検出されていない。後世の植林・伐採等に伴う土地改変により失われた可能性もあるが、仮にそうだとしても痕跡が残らないという事実は、古代の人々が活動したとしても限られたものであったことを示すのであろう。前述した小奥戸(2)遺跡では発掘調査により奈良時代の堅穴建物跡が1棟検出されている。同遺跡は現在の海岸線から直線距離で東方へ数百m程離れ、標高は10m前後を測る。海岸線から1km程内陸の高台に位置し、縄文時代後期を主体とする本遺跡との比高は20数mを測り、立地する段丘面も1段違う。大間町を含め周辺での古代遺跡の発掘調査や検出された遺構例も少なく一概には言えないが、大間地域の古代の人々は内陸部より海岸線に近く、比較的標高の低い場所を選んで住生活を営んでいた可能性も考えられる。

これまでに発掘調査が行われた他の大間町、及び周辺地域の遺跡では縄文時代から古代にかけて、第2章第1節でも記したように赤井川・置戸産の黒曜石をはじめとして続縄文土器、擦文土器等、北海道との結びつきを示す遺物の出土例は比較的多い。本遺跡を含め、未だ縄文時代後期前葉、或いはその前後に人々が津軽海峡の行き来に用いた手段の特定には至っていないが、北海道石狩市石狩紅葉山49号遺跡では縄文時代中期後半期から後期初頭の所産で、河川での漁撈活動に用いたと推定されるヤチダモで作られた丸木舟の一部が、その推進具である櫂、漁撈具の鉤、ヤス、タモ網枠、魚たたき棒などとともに出土している。また、同遺跡では出土層位から丸木舟と同時期、産地同定による岩手県久慈産の琥珀の存在も明らかとなっており、本州から北海道にもたらされたと考えられる遺物の出

土例も少なくない。これらの出土遺物から見ても当該期、木製の舟を用い本州と北海道との境界である津軽海峡を行き来し交易・交流に関わっていた人々が存在していた可能性は高い。

(笠森)